Speech by H.E. Ambassador Osawa
on the occasion of
52th Japan New Zealand Business Council
Annual Joint Conference
(2 November 2026, Sendai)
(Delivered in Japanese)

第５２回日本ニュージーランド経済人会議の開会に当たりまして、一言ご挨拶申し上げます。

まず、本会議の開催に向けてご尽力された経済委員会の皆様、特に新たにご就任された磯野裕之日本側委員長及びイアン・ケネディニュージーランド側委員長に、心から敬意を表します。また、２０１９年以来７年間にわたり本会議を牽引してこられた市川晃前日本側委員長に、深く御礼申し上げます。そして、本会議を温かくお迎えいただいた宮城県、仙台市の皆様に感謝申し上げます。

ただいま、追悼の儀において、皆様とともに祈りを捧げました。２０１１年２月に発生したクライストチャーチ地震、そしてその３週間後に発生した東日本大震災から１５年が経ちました。両地震の犠牲者の方々のご冥福を、改めて心からお祈りいたします。

私は東日本大震災に特別の思いがあります。東日本大震災発生時、私は東京の農林水産省で働いており、震災復興の責任者になりました。津波で一瞬のうちに破壊された水田、漁船、陸揚げ施設、餌の補給ができずに苦しむ牛など、想像を超える悲惨な現実を目にしながら、時に抑えようのない怒りも覚えつつも、復興への道筋を関係者、関係省庁の方々と必死に考えていた日々を思い出します。

クライストチャーチの地震が発生した時、日本から語学研修に来ていた学生が通うビルが倒壊し、希望に満ちてニュージーランドで語学研修を受けていた日本人２８人の命が一瞬のうちに奪われました。私は大使として、２０２４年から毎年、被災者のご遺族とともに市が主催する慰霊祭に出席しています。本年９月には日本から関口参議院議長ほか各党の代表も慰霊に来ていただきました。

このように両国はいずれも似たような自然災害が頻発する地域であります。

そして災害に対する特別の思いも共有しています。当時は双方の救助隊が相互に派遣されて協力し合いました。本年の全体テーマは「日本・ニュージーランドの信頼と共創で築くレジリエントな未来」です。こうした両国だからこそ、そして悲惨な災害を経て復興したこの仙台の地だからこそ、両国の経済連携の新しいロードマップが描けるのではないでしょうか。

翻ってみると、近年のニュージーランドと東北の大震災後の産業展開にはかなり共通する側面があります。ニュージーランドはエネルギーの 9 割を再生可能エネルギーで賄っている国ですが、東北地方も洋上風力や地熱発電の開発が盛んです。ニュージーランド政府は水素エネルギーを振興しており、日本企業も盛んにその実証に取り組んでいますが、福島でも水素エネルギーを復興の柱の一つにしています。ニュージーランドはロケットの発射数で世界第 3 位と宇宙産業が盛んですが、東北でも JAXA をはじめ多くの宇宙産業が立地しています。さらに、ニュージーランドで利用されている車のトップは日本車ですが、東北各地の工場で生産されたものも貢献しています。防災や養殖に関する研究協力も行われています。

皆様、来年日本とニュージーランドは外交関係樹立後７５周年という、記念すべき年を迎えます。ニュージーランド人の日本に対するイメージは極めて良好です。ここにご列席の日本企業がニュージーランドの農林水産業をはじめとするモノづくりに積極的に投資され、あるいは良い製品を輸出されて、ニュージーランドの国づくりに貢献してきたことに大きく拠っていると言っていいでしょう。今月末からは成田とクライストチャーチを結ぶ直行便も開始されます。本会議で交流をさらに深めるための知恵がたくさん生まれ、さらに強固な関係を築いて７５周年を迎えることが、私のささやかな夢です。本会議の成功をお祈りして、私の挨拶といたします。

ご清聴ありがとうございました。